

## 新型コロナワクチン副反応の心筋炎 感染症の場合より重症化せず

2023/02/28 毎日新聞



注射器に充填（じゅうてん）される新型コロナウイルスワクチン=仙台市宮城野区で2021年5月、和田大典撮影（毎日新聞）

感染症によりウイルスが心臓の筋肉に感染すると、炎症を起こし心機能が低下する「心筋炎」になる場合がある。心筋炎は、新型コロナウイルスワクチンの副反応の一つとしても知られる。感染症と副反応でなる場合を比べたところ、副反応の方が壊死（えし）する心筋の量が少なく、重

症度は低いとみられるとの結果を、横浜市立大の研究チームがまとめた。

海外の複数の報告によると、副反応による心筋炎は10万人当たり1~2人程度の接種者で見られる。2回目の接種後で若い男性に多い傾向が知られているが、原因や詳細な状況などは不明な点が多い。

横浜市立大の研究チームは、海外の12件の論文から、副反応による心筋炎と診断されたMRI（磁気共鳴画像化装置）の画像274人分を解析した。多くは若い男性で、191人は2回目の接種後に心筋炎が起きていた。

解析結果によると、88%の患者に左心室の心筋壊死や、壊死後に細胞が脱落する線維化が起きていた。ただし心筋の壊死量は、全体の1~3.9%と少なかった。胸の痛みやだるさ、動悸（どうき）などの症状が出た患者でも、心機能はほぼ正常に保たれていたとみられる。

これに対し感染症による心筋炎では、壊死量が全体の10~15%と言われている。このため、副反応の方が画像上は比較的軽症と考えられると結論づけた。ただし、副反応の場合でも突然死の報告例があり、重症化しないわけではないという。

一方、副反応の方の274人のうち、87%の患者はMRIを使う急性心筋炎の診断基準を満たしていた。つまり、9割近くの患者はMRI検査で見つけられることになる。

研究チームの加藤真吾・横浜市立大病院放射線部講師（循環器画像診断学）は「これまで不明だった心筋症の一端を明らかにできた。壊死量などが分かり、治療法の確立につながる可能性がある」と話した。

研究チームの分析結果は (<https://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1002/ehf2.14236>) で公表されている。